

Dr.ひろみの

ハッピー子育てひろば



☆プロフィール☆
鈴木 裕美 (すずき ひろみ)
香川大学医学部 小児科専門医

みなさん、こんにちは。最近、壮絶な虐待を受け、3度死にかけながら生き抜き、3児の母で虐待の加害者支援と予防に奔走する島田妙子さんの本を数冊読みました。島田さんの子育て中のエピソードで自分が「くない劇場」の主演女優になっていたという話がとてもおもしろかったので紹介します。頑張るお母さんが陥りがちな「わかってくない、聞いてくない、助けてくない」とイライラ、うつうつする「くない劇場」。そこで悲劇のヒロインを大女優張りに演じてしまって、夫にも子どもにも姑にも怒り爆発状態になってしまう。誰にでもありますよね。島田さんはそこから抜け出すために、「今、生きていること」に感謝し、「今、あること」に注目して「ありがとう」と言うようにしたそうです。「ないもの」を数えているうちは幸せになれないですもんね。私たちも「くない劇場」から降板して、当たり前にある、何気ない生活にスポットライトを当ててみませんか？見えている世界が変わるはずですよ。

今回は『善意のネグレクト』です

多くの方が子育てに熱心で、子どもにとっても関心があります。一生懸命に子どものことを考え、心配するあまり、

子育て通信3号より

子どもが求める3つのこと

- ① 愛情
「愛してほしい」
- ② 関心
「見てほしい」
- ③ 前向きな注目
「認めてほしい」

「見てほしい」という気持ちを満たすのは、実は難しいのです。



子育てあるある言葉かけ

こうするのがベスト！

あなたのためよ！

〇〇くんもやりたいでしょ？



本当はやりたくないな。もう嫌です。

本当にそうなのか？振り返ることも大切かもしれません。

ネグレクト（育児放棄）された子どもは、「見てほしい」の気持ちが満たされず、親を含めて人間全体に「信頼感」をもつことができず、人との関わりに困難を感じる人が多いものです。実は、過干渉で育てられた子どももまた、「(本当の自分を)見てほしい」「(本当の気持ちを)わかってほしい」という思いが満たされず、同じように「信頼感」を育てることが難しくなります。子どもの気持ちや意思をネグレクト（無視）する。子どものことを思っていることだとしても、それはネグレクト（育児放棄）した時と同じ影響を子どもの心に与えます。それを私は「善意のネグレクト」と呼んでいます。そういう子どもたちは、遅かれ早かれ親の期待に応えるためだけに生きている自分に悩み苦しむ、そう仕向けた親に怒り恨むのです。親も良かれと思ってしているので、子どもが怒っている理由が理解できず、期待通りにならない子どもに腹が立ち、心無いことを言って傷つけてしまいます。

自分は子どもの気持ちを理解しているか？自分が見ている子どもは本物か？子どもは自分ではない「他人」であることを許しているか？一度立ち止まって考えてみてください。目を見て話を聞いてください。呼ばれたら、「なあに？」と優しく答えてください。

もし、悲しいことや困っていることも、あなたに話せているのであれば、「信頼感」が築けている証拠です。